

道徳科を要として学校教育全体で取り組む道徳教育の充実

帯広市立稲田小学校 学級数 23 (校長 伊賀 真美)

I 本校の道徳教育

「学校における道徳教育は、特別の教科である道徳を要として学校の教育活動全体を通じて行う」という学習指導要領の記載について、本校では、道徳教育の取組を図1のようにアーチ橋の構造をイメージし、整理した。



- 要 石** 道徳科の授業改善に係る Active 5 の取組
→ 研究部
- 迫石① 教科等横断的な取組→教務部
 - 迫石② 各学級における取組→学級
 - 迫石③ 校内環境の整備に係る取組→学年
 - 迫石④ 校種間、家庭、地域との連携→主幹教諭
- 道徳教育推進教師の関わり

【図1：稲田小道徳・アーチ橋モデル】

II 道徳教育に係る取組

1 道徳科の取組（「要石」の取組）

・本校では、道徳科の授業づくりの要素を表1のように5つの視点（以下 Active 5）にまとめ、授業改善に取り組んできた。特に、(1)の「ねらいをはっきり」では、児童の実態や道徳教育のカリキュラムとの関連性等、様々な方向からねらいを明確化するようにした（図2）。

要石【Active 5】	◆道徳科の目標
(1) ねらいをはっきり	→ 目標に示された全ての要素
(2) 課題意識を子どもにもたせて	→ 自己を見つめ
(3) 自分と向き合う時間の確保	→ 自己の生き方についての考えを深める
(4) 考えたい、言いたい、聴きたい	→ 物事を多面的・多角的に考え
という意欲を引き出す発問	道徳的諸価値についての理解
(5) 子どもの思考を助ける板書	→ 自己の生き方についての考えを深める



【表1：Active 5と道徳科の目標との関わり】

【図2：ねらいに関わる要素】

2 学校の教育活動全体で推進する道徳教育の取組（「迫石」の取組）

・本校では図1に示したように、特に4つの取組を意識して実施している。

迫石①：教科等横断的な取組

本校では、各学年の別葉を拡大し、職員室の後方に掲示している。週に1度、学年打合せの際に、別葉の取組を意識して教育活動を実践できたかを学年の教員で振り返り、



【図3：別葉を点検する教員】

迫石③：校内環境の整備に係る取組

本校では、重点内容項目を意図的、計画的に指導することはもとより、項目と関連付けた環境を整備することで、学校の特色を生かして重点的な道徳教育が展開できるようにしている。



【図4：重点内容項目に係る掲示】

迫石②：各学級における取組

本校では、道徳教育の各学級における指導計画を作成している。こうした計画が、4月の作成時点でゴールとならないように、下方に重点目標についてのアンケート結果（年2回）を記載することで、より一層、重点目標を意識した取組が進むように工夫している（図5）。このように、計画したことを確実に実施、評価、改善していくことが重要であると考えている。

第1回アンケート結果

1 勉強や運動、仕事など自分でやろうと決めたことは、最後まであきらめずにやるのが大切だと思う。	72%
2 だれにでも、心のこもった挨拶や言葉づかいをすることは大切だと思う。	82%
3 勉強や運動、仕事など自分でやろうと決めたことは粘り強く、くじけずにがんばっている。	38%
4 だれにでも、心のこもった挨拶や言葉づかいをしている。	44%

努力と強い意志、礼儀のどちらも大切だということは「分理解しているよう」だが、実践面では、割合が半分近くに減るため、道徳の時間を要として、実践をもてるような授業を心掛けたい。また、日常の道徳教育についても引き続き

【図5：学級の道徳教育の指導計画】

III 成果と課題

- 道徳教育におけるカリキュラム・マネジメントの充実により、学校の教育活動全体を通じた道徳教育の相互の関連性が明確となった。
- 道徳科では、年間指導計画に基づく35時間の授業の量的確保とActive 5に基づく一つ一つの授業の質的転換を意識した授業づくりに取り組む必要がある。